

先週のクリスマス礼拝では、救い主イエス様の御降誕をともに喜び、感謝しました。イエス様は神の御子ですが、私たちを罪から救うために人となって生まれてくださいました。イエス様はまことの神であり、同時にまことの人です。イエス様によって表された神の愛と恵みを感謝します。

聖霊によって処女マリアの胎に宿った御子は、すべての人と同じように生まれ、成長していきました。ただ一つの点、原罪がなく、罪を犯されることはなかった点はすべての人と違いますが、その他の点ではイエス様は私たちと同じような成長過程を通られたのです。各福音書はイエス様の公生涯のことを記録していて、その前のイエス様の様子はほとんど書かれていません。今日開いた聖書箇所はイエス様の少年のときの記事が書かれている唯一の箇所です。

この福音書を書いたルカは 1 章の初めに「すべてのことを初めから綿密に調べていますから…順序立てて書いて差し上げるのがよいと思います」と記しています。おそらく彼はイエス様の母マリアあるいは彼女に近い人物からも話を聞いて記録したのだと思われます。マリアには、イエス様が公生涯に入られる前の約 30 年間、一緒に生活した中でたくさんの思い出があったことでしょう。その中で、イエス様が確かに神の御子であることを示す出来事を一つ挙げるとすると、この箇所に書かれているエピソードだったということなのでしょう。

1. 敬虔な両親のもとで成長（：41）

イエスがお生まれになった後、両親が律法に従って行動したことが記されています。2 章 21 節には、定められている通りに生まれて八日目に割礼を施したこと、22～24 節には、出産後のきよめの期間を守ったこと、その後エルサレムの宮に行き、男子の初子を主に献げる儀式を行ったことが書かれています。そして、39 節に「両親は、主の律法にしたがってすべてのことを成し遂げた」とあります。

その後、ヨセフとマリアは自分たちの町ナザレに帰り、そこで生活し、イエスを育てました。その生活の中でも律法にしたがって生活していったことがうかがえます。「イエスの両親は、過越の祭りに毎年エルサレムに行っていた」ことから分かるように律法にしたがって生活をしていたのです。

ユダヤ人の家庭では、子どもが小さい時から親が子どもに旧約聖書に基づいて教えます。ヨセフとマリアも幼子イエスによく教えただろうと思います。また、ユダヤ人の会堂では子どもたちを集めて、律法学者が律法を教えました。幼子イエスも聖書を暗誦し、学んだはずで

すが、やがてヨセフとマリアには子どもたちが生まれ、イエスには弟、妹ができ、家族は賑やかになったでしょう。少年イエスは、ヨセフの大工の仕事を手伝ったり、マリアを助けて弟や妹のお世話をしたりしたことでしょう。そのイエス様と家族の上に神の恵みがありました。

2. 12 歳のときの過越の祭り（：42～50）

イエスが 12 歳になったときも、両親は過越の祭りを守るためにエルサレムに上りました。祭りの期間を過ぎてから、ヨセフとマリアは同行の人たちと共に帰路につきました。ところが、一日歩いたところで一行の中にイエスがいないことに気づきました。親族や知人の中を捜し回りましたが見つかりません。ヨセフとマリアはイエスを捜しながらエルサレムまで引き返しました。

三日目になって、ようやくイエスを見つけました。エルサレムの宮の中で、律法を教える教師たちの真ん中に座り、彼らと語りあっていました。少年イエスの知恵に人々は驚いていました。その知恵というのは、人間的な知識ではなく、神のみこころを明らかにする知恵であったと思います。

イエスの様子を見て驚いたのは両親も同じでした。敬虔な両親のもとで育てられたり、地元で律法を学んだりしたことでは、これほどの知恵と答えをすることはできないという様子だったのでしょう。

しかしそのことよりも、イエスを捜し回って来た母マリアは心配が募っていたことでしょう。思わず厳しい口調でイエスに言いました。48 節。このような時の子どもに対する母親のことばとしては当然のものです。それに対するイエスの答えは、普通に想定されるようなものではありませんでした。むしろ、全く思いもよらないことばでした。49 節。

イエスは神を「自分の父」と言いました。天の神、主が自分の父であり、自分が神の子であることを意識していました。天の御父との親しい交わりを意識する御子イエスの姿がすでにこの時にあったのを見ることができます。敬虔な家庭で育ったことで得られる以上の神との親密さと神への献身があることが分かります。

ここまではヨセフとマリアが主体で記事が進んできましたが、ここで少年イエスに入れ替わります。マリアとヨセフの敬虔な信仰の歩みが主のみわざの中で用いられましたが、さらに主イエスの歩みは天の御父に従順であり、自らを献げるものとなります。

そのことは「自分の父の家にいる」ということばの理解にもつながります。当時の「家」という概念は、場所のことだけでなく、権威を表していました。イエスは神の臨在が表される神殿にいますが、そこで神の権威のもと、みことばについて語り合い、御父のみこころを明らかにしていたということです。イエスのまことの父は誰なのか、イエスは第一に誰に従うのかということが明らかにしているのです。たとえ両親から離れることになっても、イエスはそのことを明らかにしたのです。

父なる神様との親密な交わりとみこころに対する従順と献身は、主イエス様によって救われた私たちにも与えられます。「わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存知なかったのですか」ということばに表されている主イエス様の態度に、私たちも倣いたいと思います。

3. 公生涯に入るまで（：51～52）

このときのイエスのことばを両親は理解できませんでした。しかし、母マリアは「これらのことをみな、心に留めておいた」とあります。やがて、主イエスの公生涯、十字架とよみがえり、聖霊降臨を経て、マリアは理解できるようになります。そして、御使いが自分に告げたようにイエスが「神の子」であることの真理を知るようになったのです。

その時は分からないことでも、心に留めておくことが大事でしょう。分からないから信じないとか、取り合わないというのではなく、やがて主が分からせてくださることを期待して、心に留めておくの良いのです。

神殿での出来事後、イエスは両親と一緒にナザレに帰りました。そして、「両親に仕えられた」のです。ヨセフの仕事手伝ったり、マリアを助けたりして、両親を敬い、大切にされたことでしょう。周りの人々のことも同じように愛して、親切にしていたことでしょう。「神と人とにいつくしまれ」たとあります。

イエス様の公生涯に入ってから福音書の記述に、父ヨセフが出てくることはありません。それで、おそらくヨセフはその前に亡くなったのではないかと考えられています。とすれば、イエスは父が亡くなった後は、大工として働き、家族を養い、母マリアを助けて、兄弟たちを守って生活していたのだろうと想像できます。その中で、人々の様々な悲しみや苦しみを味わい、知ったことでしょう。そして、この世の現実に対する父なる神のみこころをみことばによって受け止め、そのことを周りの人たちに表していかれたことでしょう。

神の子として自覚がありながらも、ナザレの町で、30歳くらいまで家族に仕えたのです。そのイエス様の謙遜と従順にも倣いたいと思います。

私たちも御子イエス様によって贖われ、救われて、神の子としていただきました。神の恵みにより、信仰によって、神の子どもとなりました。それでも、生活の場が変わるわけではありません。しかし、私たちは御霊によって新しく造り変えられ、それぞれの場に主によって遣わされているのです。神の子どもとして、人々に仕えて歩むことを求められています。そのような私たちの歩みに、イエス様は模範を示してくださったのです。

私たちも父なる神の家にいることを第一としましょう。父なる神との親密な交わりとみこころに対する従順と献身を意識しましょう。また、父なる神に愛されている私たちが互いに愛し、仕える者となりましょう。